

南志賀の地は、昔から古瓦が出土することが知られていた。

昭和三年と昭和十三年から十五年にかけての二度の発掘調査によって、塔、金堂、僧坊跡などが見つかり、この地に寺院が存在していたことが明らかになった。また、その後の調査で、この寺院跡の伽藍配置は、塔と西金堂が東西に対置し、これらを取りまいて回廊がめぐる「川原寺式伽藍配置」であることがわかった。このうち、塔、西金堂、金堂の基壇は瓦積みで仕上げられていた。

調査の際には多数の瓦や土器が出土しており、その中にはこの地でしか見られない蓮華を横から見た文様で飾られた方形軒瓦もある。これらの遺物等から、白鳳時代から平安時代末頃までこの寺院が存在していたことが明らかになった。

(現地の説明板から)

大津市南志賀。約30本の桜に囲まれた公園の中心に、直径約1.5メートルの巨石が露出しています。飛鳥時代(7世紀後半)に建てられた「南滋賀町廃寺跡」(国史跡)の、塔を支える礎石として使われていたものです。

廃寺は南北約130メートル、東西約80メートル、天智天皇の宮殿だった近江大津宮跡の北、約800メートルの中軸線上にあります。

この寺は667年、大津京が造営された時に、同時に造営されたと考えられま

す。そして金堂や塔などの主要伽藍は、飛鳥に同天皇が築いたとされる官営寺院・川原寺跡と同じ配置だったのです。

川原寺は、天智天皇の母・斉明天皇の宮殿・川原宮の跡地に造られました。母の目前で蘇我入鹿を倒した645年の乙巳の変から663年の白村江の戦いの前まで、古代日本の激動の時代を、二人三脚で歩んだ母を弔うためとみられます。

遷都後も敬慕の念は篤く、宮の真北に同様の寺院を築いたのでしょうか。壬申の乱で、弟の大海人皇子に敗れ、都は再び飛鳥に戻されますが、この寺は平安後期まで存続しました。しかしその頃はこの寺の置かれたところが、古代の一時期に京(みやこ)であったことを知る人は、居なかったのではないのでしょうか。

